

高句麗と新羅の文物と古代の文字文化

岡 泉 水（地理特論担当）

本稿の目的は、日本の古代文字にみられる高句麗および新羅の文化的影響を探ることで、金石文や木簡などにあらわれる文字資料の解釈を試みようとするものである。物質文化で客観的な部分を押さえ、主観をまじえて解釈する立場ですめるが、ご指正いただければ幸いである。まずは4～5世紀の高句麗と新羅の歴史を概観しておこう。

I. 古代東北アジアにおける高句麗と新羅・倭

1. 4世紀の高句麗と新羅

4世紀の日朝関係を直接にも語る史料といえば、石上神宮の七支刀銘文と高句麗・広開土王碑文である。文献の『日本書紀』はこの時代のことを詳しく記述するが、後世に編纂された史料であり、編纂時の政治的意図が濃厚で、虚心に受け入れ難い記述もある。朝鮮側の『三国史記』は高麗期仁宗23年(1145)の編纂で『書紀』などよりずっと後代の史料であるから、これまたナマの4世紀の記録とは言い難い。その点で、七支刀の銘文と広開土王碑文は、同時代史料として価値が高いが、研究者の釈文によっては異なる見解が出るので、金石文とはいえ真正なる史実を知るには慎重な態度が必要である。広開土王碑文の文体は正格の漢文体で刻まれているが、文字や用法に特徴がみられ、金石文研究のよるべき根拠となりうるものである。かつて碑文の改ざんなど、拓本に疑義を唱える議論もあったが、近年の原石拓本による研究や拓紙自体の資料の検討などがすすみ、見直されている。高句麗史第一級の史料であり、独自の文字

文化をさぐるうえで基本となる同時代史料であることはいうまでもない。

日本では空白の4世紀といわれるが、4世紀後半の東アジア情勢をみると、『日本書紀』の編纂時には高句麗と政治外交的に問題がなかったのか、記事がみられない。ところが、広開土王碑文によると、4～5世紀の倭は高句麗と敵対して戦っていたもようである。『三国史記』をめぐっても4世紀の前半については不明なことが多いが、後半の360年以後になると記事も増えて半島情勢と動向がわかる。

高句麗は、倭と国交を樹立した百済に侵入（369）、2年後の371年にも百済に侵入して、逆に百済の反撃を受け、故国原王は敗死してしまう。翌年、百済は中国南朝の東晋に入貢するが、高句麗はこれに対抗するように、北朝の前秦と結ぶ。高句麗に仏像・仏典が伝わるのはこの年である。この前後、百済は新羅と領土紛争で不仲となり、以後百済は倭との連携を必要とするようになる。七支刀や『鹿袋』にみえる護身剣は百済から贈られたもので、百済を支援する倭にたいする礼品とみられる。新羅は381年に、高句麗の幹旋で前秦に入貢している。この10年後、広開土王碑文によると、新羅は倭の侵入を受け、高句麗に援軍を求めて大軍を派兵するということになる。倭はまた百済と同盟し、永樂9年（399）には新羅を攻撃している。かくして南朝—百済—倭に対して、前秦—高句麗—新羅の同盟が4世紀後半の東アジアで成立するようになる。

とくに慶州・皇南大塚南墳出土の鉄鉞・鉄鋌・馬具などはこのときの事情をうつつしているのではないかと（齊藤2013）。新羅は騎馬軍団の隊列・鹵簿など重装騎兵や歩兵の武装・軍構成を高句麗から受けいれ、冠・履の制を受け容れつつも独自の階層化を整備して地方を組織的に管理する体制を築いていく。新羅の国家形成にあたり、高句麗の影響は排除しがたいのである。

2. 広開土王時代の高句麗と三燕・北朝

高句麗の文化的な側面を垣間見る前提として、4～5世紀の歴史を五胡十六国時代の東アジアの情勢から眺めておこう。高句麗は313年から楽浪・帶方郡の

故地を支配して、台頭しつつある百済や新羅に対する南進策の根拠地としたが、楽浪・帶方郡の滅亡後もそこに残留した中国系の人々がいた。現在の平壤や安岳・信川・鳳山郡一帯である。高句麗はこの楽浪郡の漢文化を継承したとみられる。亡命漢人、某氏鎮（徳興里古墳の被葬者）のような人物が、楽浪・帶方郡の故地に残っていたので、文化的にも貢献したと考えられる。

336年に前燕から亡命した冬寿の墓誌が見つかった安岳3号墳の石室と東晋353年の佟利墓（平壤駅前塼室墳）などが中国系の墓で、平壤遷都以前の集安では見られないスタイルの墓である。安岳3号墳の石室は遼陽地域の系統で、佟利墓は魏晋以来の塼室墳の流れを汲むが、そうした遼東郡出身の被葬者が高句麗における中国文化の担い手であったものと考えられる。冬寿は、当時の高句麗で故国原王に仕えた中国系の官人であった。黄海道胎封里1号墳は漁陽郡（北京の北東）出身の張撫夷の墓で、戊申年（348年か？）の造営である。黄海道では塼築墓の塼の銘に、王氏、孫氏、韓氏などの名があり、ほとんどが東晋年号を用いている。これは、漢族の正統王朝が江南であると認識していたからであろう。高句麗の漢字・文字文化に残留漢人の知識や教養が大いに生かされたことを想像させる。日本の5世紀代、いわゆる「倭の五王」が南朝に使節を派遣したことも、漢族の正統な王朝が南朝であったからで、当初は漢族流の正格の漢文や文字文化が伝わったに違いない。

4世紀の前半、前燕の慕容皝が丸都城を攻略、遼東を確保した慕容氏は高句麗と対峙して、高句麗としばしば干戈を交えた。王都・集安にある「国内城（通溝城）」の築造は342年といわれる。燕王を称した鮮卑族の慕容皝は、342年、5万の大軍で王都に侵入して前王美川王の墓を暴いたが、その翌年、故国原王は前燕に臣従して父王の屍を取り戻し、355年には冊封体制にはいつて征討大將軍營州刺史楽浪公の称号を受けた。前燕から亡命した慕容仁の部将だった冬寿は367年に埋葬されたが、安岳3号墳はその墓である可能性が大きい。前秦が370年に北中国を統一すると、小獸林王は前秦に使いを送り、新羅使を同伴させた。前秦からは仏像・仏典が伝わり、仏僧が渡来し、375年に伊弗蘭

寺や肖門寺などの寺院が建立された。都は集安の時代であるが、この2寺は平壤に建立された可能性がある。のちに述べる高句麗の文字文化の普及は、仏教の受容・定着と深く関わっているといつてよい。高句麗には中国の南北朝・三燕諸国の文字文化が入っていることは間違いないが、仏教や道教にともなう文字文化の伝播はその後急速に朝鮮三国の文字文化の発達に影響を与えたものとおもう。古代朝鮮の文字文化の成立にあたり、高句麗の文化的役割は大きい。

5世紀初頭、高句麗の背後では、慕容氏本流の燕国（後燕）が北方におこった北魏と対峙しながらも遼東を支配していた。広開土王碑では無視されているが、「高句麗本紀」によると、高句麗は385年、396年に慕容氏の後燕と戦っている。5世紀初めにかけて攻防はつづき、南燕、北燕などとも外交交渉が行われたが、西方を押さえて南進策に転じた。中国史上、民族の大移動がおこなわれた五胡十六国の攻防のなかで、中国の諸制度や文化要素が人とモノの移動にともなって、高句麗、さらに新羅へと伝播していった。広開土王碑に「高句麗本紀」にはみえない倭との攻防が記されているのはやや不可解であるが、これは、高句麗の南下政策とかかわるであろう。倭は、高句麗の領土拡大にあたり、目障りな存在であった。

広開土王碑によると、4世紀後半から5世紀前半の時期、高句麗は南方の百濟・新羅・倭のみならず、稗麗（契丹の一部族か）、肅慎（挹婁）、東扶餘などと戦っている。具体的な戦闘内容は明らかではないが、領域拡大のようすをもの語っている。広開土王と長寿王親子が活躍した4世紀後半～5世紀前半代は、高句麗の全盛期である。もっとも391年の広開土王即位から長寿王死去まで100年ほどあるが、考古学的にもう少しせばめて捉え、仮に広開土王時代と呼んでみたい。

3. 高句麗抑圧下の新羅

新羅に対しては、とくに5世紀初めに高句麗軍が圧力をかけ、新羅領域内に駐屯したことが文献や碑文で確かめられるが、新羅が斯盧国から新羅へと古代

国家として成長する過程で、高句麗の援助・庇護があったことはおおかたの認めるところである。新羅の国名がはじめて中国史書にあらわれるのは377年で、このときは高句麗使節にともなわれて前秦に遣使した。奈勿王（麻立干）代のこと、このときは辰韓諸国の代表としての新羅であろうが、さらに382年には新羅王楼寒が使者衛頭を前秦に遣わし、秦王苻堅に美女を献上したとある（『太平御覧』巻七八一、四夷部二、本夷二、新羅引用の『秦書』逸文）。楼寒は当時の王号麻立干のことを指し、奈勿王のことであるが、主体的な入貢ではなかった。417年の訥祗王即位にさいしても高句麗兵が関与したほど支配に服していた。

4～5世紀の新羅は高句麗の強い抑圧のもとに従属していたといえる。5世紀半ばになると新羅は高句麗の圧力から逃れようと、百済と連携して高句麗と戦った。しかし中原高句麗碑にみえるように、高句麗は新羅に対して衣服（官服）を与えたり、「新羅土内幢主」なる軍司令官を派遣したり、と強い態度でのぞんでいた。

『三国史記』の「新羅本紀」には、紀元前50年から倭が新羅の領域を侵犯したという記事が頻繁に出ている。日本の弥生人が「寇」をはたらいたというのである。新羅はこれに戦闘態勢で望み、国防が大きな外交上の問題であった。さらに4世紀後半には倭がさかんに新羅領域に侵入した。広開土王碑文にも記されている永樂10年（400）の高句麗軍南征は対倭救援軍で、新羅の王京に駐屯した。高句麗軍はさらに南下して任那加羅（金海）に至ったという。このとき侵入した倭の主体を「大和王朝」とみるか、九州北部から山陰にかけての「地方勢力」と考えるかで歴史の解釈が異なってくる。金海地方の考古学的知見などを勘考すると、弥生時代には北部九州に古代日本の覇権があったので、3世紀以前に韓国の東南地方に進出した勢力は、武装した海人集団を統率できる北部九州の勢力であったと考えられる。4世紀から5世紀前半にかけては大成洞古墳群でみるように、金海地方を中心に木槨墓が盛行し、蒙古鉢形冑・挂甲・豎矧板短甲などの鉄製甲冑が多量に生産され、副葬される。また北方系馬

具もこのころ普及し、オールドス型銅鍔・虎形帯鉤・銅鈴などの北方系遺物も出土し、武器の毀損行為などの習俗も確認される。高句麗軍の南征と北方系文物の新羅・加耶への流入が関係するのかどうかまだ断案を残すが、新羅・加耶の古墳から北方系の遺物が出土するのは事実である。この時期、古代日本の交渉相手は近畿のヤマト王権であった。5世紀の前半、新羅と倭（近畿の河内王権）の関係は考古学的にみて敵対していたようではない。朴天秀は、この時期の交流実態を例示しながら王権を介しての日羅交渉を説く（朴2007）。鉄鋌や金などの資源を求めている倭王権は新羅と良好な関係であったといってもいい。『日本書紀』允恭紀3年条、42年条の記事もそれを物語る。

新羅の王都周辺には対倭賊防衛の山城が多い。とくに5世紀後半から新羅が積極的に政治活動を始める時期に山城の築造が増え、軍事・行政の拠点となるようだ。倭国は朝鮮半島に頻繁に進出して百済・新羅の優位にたち、人質をとって服属させて、高句麗と争うまでに古代国家としての機構を整えていた。さらに国際舞台へ上昇志向と意欲に駆り立てられ、中華の正統たる南朝の宋などへ叙爵を求めて使節を送る、いわゆる「倭の五王」の時代となり、対外的に大きく発展した。最後の武王の上表文をみると漢・韓の渡来系官僚や人質・亡命貴族らが作成に関与したであろうことが想像されるのである。

永樂9己亥年（399）と永樂10年（400）の記事は、新羅の要請で広開土王が救援の兵を出して倭人を撃退したので、新羅王は高句麗に朝貢したと伝える。

新羅の領域では中国文化の痕跡は少ない。具体的に考古資料をみると、百済地域で出ような中国陶磁が新羅の中心、慶州の古墳などから出ないこともそれを裏付ける。また漢江流域のように高句麗式の基壇式積石塚や高句麗土器なども目下のところ存在しない。

百済では、中国の西晋・東晋さらに北魏・梁などから流入した中国陶磁が多く出土する。ソウル・夢村土城、同・石村洞古墳、原州・法泉里、扶安・竹幕洞、益山・胎峰寺址、同・笠店里古墳、扶餘・扶蘇山城などで中国陶磁の出土例があるが、古墳のみならず宮殿跡、城郭、祭祀遺跡、生活遺跡などにひろく

分布する。漢城百濟時代の4世紀後半のころからさかんに交易した結果である。それに比べて、新羅・加耶地域では1～2点の事例が知られるに過ぎない。皇南大塚北墳出土の黒褐釉小瓶は東晋あたりの南朝産陶磁器であろう。福泉洞65号墳出土の緑褐色青磁は新羅時代に輸入されたものであろうが、珍しいものである。百濟に比べて中国文化の受容・摂取の態度に大きな違いがあったと言える。原州・法泉里2号墳出土の青磁羊形器（4世紀中葉）は、中国・南京の王羲之族の象山古墓群に類品があり、彼の地からの搬入品である。しかし、象山古墓群などで出土する東晋の銅甕は、漢城百濟時代の遺跡で出土事例がない。後述する高句麗および新羅出土の銅甕は、中国製品を高句麗で模倣製作したという意見もあるが、モデルは江南の製品ではなさそうだ。

それに比べて、慶州の「邑南」を中心とする古新羅の古墳に高句麗の文物が多いことは、支配層に高句麗の文化が浸透していたことをしめす。新羅は高句麗を通して、中国の文字文化を摂取・受容したともいえる。『梁書』に「新羅には文字がない…（無文字 刻木爲信）」（『梁書』卷五四、「東夷」、「新羅伝」と記されているが、中国文化との疎遠さを暗に物語るかのようだ。後述するように文化的にも新羅は高句麗に従属していた。広開土王碑文によると、広開土王即位以前に、新羅は高句麗の属民であったという。新羅は政治・軍事面で高句麗からかなりの影響を受けていたことはまちがいない、文化面でも「属国」的立場で従属していたといえよう。古代国家として長く存続した高句麗は、中国の漢・魏・晋から五胡十六諸国、北朝との通交や交渉をさかんにおこなっていたので、漢字文化の世界や独立国家として建元の必要を十分認識していた。だからこそ、391年、広開土王の即位に際し、「永樂」の年号をさだめ、以後6世紀半ばまで高句麗では独自の年号が使用されていた。新羅独自の元号は6世紀になってからで、法興王代に「建元」を始めた。仏教文化においても、高句麗の影響を排除しがたい。慶州の皇南大塚出土の漆器小椀の蓮華文は、高句麗の桓仁・米倉溝1号墳壁画の文様に似ており、また慶州でみられる初期の新羅瓦に与えた高句麗瓦の要素も考慮すると、その印象をますます深くするので

ある。



(国立清州博物館2000)

Ⅱ 新羅における高句麗系文物

4～5世紀を中心に高句麗および新羅の動きや関係を見てきたが、ここで具体的新羅の金石文と考古資料についてみることにする。

1. 高句麗の漢字（文字）文化

広開土王碑文は隸書で書かれた漢文体で、414年に建立された高句麗最古の貴重な金石文である。高句麗ではほかに、忠州・中原高句麗碑と平壤・平壤城の城壁石刻や集安・牟頭婁塚の墨書などがあり、これらが高句麗の漢字・文字文化を知る資料である。2012年、集安市麻線河の川辺で発見された「集安麻線高句麗碑」は広開土王碑と似た内容を含み、法令などを公布した貴重な史料である。韓国側で見つかった中原高句麗碑は摩滅が激しく判読不明な点が多いが、文体は正格の漢文体ではなく、古代朝鮮語になっているようだ。四面にわ

たって文字が刻まれ、高句麗と新羅が国境を接する中原（忠州）の土地に聳えるように建立されている。新羅側への告知の意味があり、碑文は双方の知識人が理解できる共通の文体とみてよい。「教」の文字が数回使用されているが、これは王命を意味するとみてよく、のちに新羅の金石文にもあらわれる。新羅・瑞鳳塚の延寿銘銀盒の線刻銘文中の不明な字も「教」（「敬」）とみて「教して造らしむ」とよんで無理はない。

平壤城の城壁石刻は陽原王の552年に築造されて、42年にわたりつくられた長安城のもので、城壁築造工事における、工事の着手年月、分担区間の方向・距離、監督者名などが刻まれており、現在6つほど確認されている。

平安北道の籠吾里山城の石刻は高句麗時代のもので、年号の乙亥年を375年とみるか、555年とみるか議論があるが、これも高句麗の金石文であることはまちがいない。このような性格の碑石は、新羅の南山新城碑や関門城でもみられる（KBS歴史スペシャル2002）。

新羅地域ではスパイク付き飾履・鳥翼形冠と耳飾りなどの装身具、鈐帶金具、甲冑、三翼・平根鎌などの武器、各種馬具のパーツ、鉄鍋など高句麗由来の文物があり、また中国経由で流入した西アジア系統のガラス器などをみると、4～5世紀の新羅地域で発見される外来系文物のなかに、高句麗製あるいは高句麗経由で流入したものがある。

その一つとして十字形の銀盒や銅製の盒（銅鉢）を取り上げ、銘文にみられる漢字・文字・符号とその文化について、考えてみたい。

2. 壺杆塚出土銅盒と銘文

1946年5月、国立博物館が解放後はじめて発掘した慶州・路西洞140号墳（以下、壺杆塚とする）から青銅製の容器（壺杆）が出土した（図1）。

この青銅製の容器は古墳の築造年代をあるていど決定し、あわせて金冠塚などの積石木槨墳の年代を推定しうる根拠となった。高句麗と新羅の交渉の具体的な裏付けをもたらした資料で、文献以外の同時代史料として重要な発見であっ

たといえる。この銅鉢の上限は5世紀初頭を遡らない。しかし、壺杆塚は新羅土器や他の伴出遺物でみると、最も新しくみると下限は6世紀第2四半世紀となり、銅鉢は伝世されたものとみななければならない。

容器の裏底には次の文字が四行、陽鑄されている。

「乙卯年國/罽上廣開/土地好太/王壺杆十」

壺杆塚の発掘を担当した有光教一は、この銅鉢（銅盒）を取り上げた瞬間、「文字の形が好太王碑の文字にそっくりだなア」と脳裏をかすめたと、当時の興奮を語っているが（有光1970）、字体は広開土王碑の碑字にきわめてよく似る。

乙卯年は415年、長寿王3年で、広開土王の没後3年にあたる年に子の長寿王がつくらせた高句麗製とみてよい。これはおそらく高句麗王であった広開土王の没後の祭祀儀礼が高句麗の都で行われたさい、祭器として使われたか、記念の引き出物として参列した諸国の使者に賜ったものとされている。新羅の使者は王族か貴族であったものと想像される。

ただし、古墳自体の築造年代は他の遺物から6世紀前半であるから、この銅鉢は伝世されたものである。銘文最後の「十」について、文字の数量をあらわす十とみるか、記号・符号の類（以下、符号と呼ぶ）とみるか、さまざまな意見がある。さらに銘文の上に「井」の字状の符号が斜めに陽鑄されているが、これらについては後述する。

この銅鉢（銅盒）と似た形態の容器は高句麗の都であった集安で類品がみられる。またこれを模倣した高句麗土器（「陶蓋碗」）が集安・麻線墓区M940で出土している。韓国東南部の浦項・冷水里石室墓出土の有蓋盒は高句麗の銅盒か新羅の銅鉢を模倣した新羅の陶質土器である。

後述の瑞鳳塚出土延寿銘銀盒とあわせて、高句麗製品が新羅の王都で出土したことは、広開土王代の高句麗と新羅の文化的な交渉を具体的に知るうえで重要である。

有光教一とともに壺杆塚の発掘を担当した金載元は、高句麗に人質として滞

在していた王子のト好が持ち帰ったとみていた。乙卯年とあるだけで年号がないが、広開土王時代の高句麗では年号を書くばあいと干支だけであらわすばあいがあったらしい。

3. 壺杆塚の銅鏡銘にみられる異体字

壺杆塚の銅鏡と広開土王碑文中にみえる「𠄎」と「𠄎」字はいずれも省略文字で、特徴的な字形である。高句麗で定着した異体文字と考えられるが、広開土王碑文は正格の漢文体で、しかもフォーマルな布告文の性格もあり、高句麗独自の文字であると断ずるにはやや不安がのこるが、高句麗最大の碑石で最古の公的碑文であること、製作にあたり漢人の関与もあったとみられるから、すくなくとも高句麗で認知されていた文字とみておきたい。

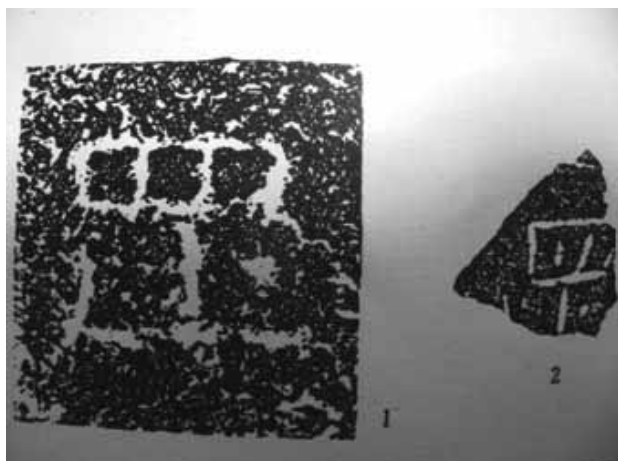


図4. 広開土王碑の「𠄎」字(1)・上和龍M7出土土器片の「𠄎」字(2)(魏1994)



図5. 「高正寺」銘墨書土器（平川2014）



図6. 岡（正）字の異体字比較（井上1988）

a 岡（𡵓）

この字は、高句麗の地域では広開土王碑のほか、集安・牟頭婁墓誌墨書銘、集安郊外の上活龍村JSM7号墳出土の土器片に刻まれている（図4、魏1994）。

この岡（𡵓）字を使う例は中国にはあまりないようだ。「岡」字は漢代の桐柏廟碑（163）に普通に刻まれているが、急就章（40）では𡵓かんむりの下に山字を書く「𡵓」、東晋の謝鯤墓誌（323）には「𡵓」字があらわれる。北魏の元嵩墓誌（507）と王悦墓誌（533）では「山」かんむりはあるが、𡵓の字体が使われている（図6）。魏晋代にはまったくみられない「𡵓」字は、漢代の「説文解字」の「岡」字の岡が𡵓に、下の「山」字を「止」字にして簡略化したものか。

広開土王碑文の字形は隸書体で北魏もしくは東晋のものに近く、楷書に移行する雰囲気のみてとれる。異体字を考えるばあい、中国の北魏をはじめ北朝の国々は漢民族ではない周辺民族であったためか、文字の字形がやや異なっていた可能性がある。平壤遷都以前の高句麗の漢文・文字文化は五胡十六国諸国のそれと同じ水準であったと考えられる。

「𡵓」字は高句麗に3例、新羅では壺杆塚の銘文中にみられるほか、蔚州川前里書石（新羅、7世紀か）などでも刻まれている。さらに事例は増えるであろう。

日本における「𡵓」の事例は多胡碑（711）、美努岡萬墓志（730）、法隆寺観音菩薩造像記（694）、威奈眞人大村墓志（707）、熊本・浄水寺碑（826）、大阪・大野寺土塔（8世紀）、橘逸勢伊都内親王願文（8～9世紀）にみられ、金石文以外にも千葉県佐倉市長熊廃寺の墨書土器（8世紀前半）に「高岡寺」とある岡の字は「𡵓」である（図5）。平城京の長屋王邸宅出土「片岡進上」木簡の片岡司の「岡」字も『𡵓』、同じく長屋王邸宅付近から出土した墨書土器（奈良時代中・後半）に書かれた「岡本宅謹申請酒五升……」の「岡」字も「𡵓」である。

最近、東京国立博物館での日本国宝展（平成26年11～12月）で観覧した類

聚国史 卷二十五「岡宮御宇天皇」（13世紀、東北大附属図書館蔵）の岡もこの「𠂔」の字であった。

道教における「真人禹歩斗𠂔」の「岡」もこの「𠂔」字であらわす。「𠂔」は北斗星の異名で「天𠂔」ともいい、「履斗歩𠂔宿」も禹歩の意味である(鈴木1977)。ちなみに現用の「剛」字の左の偏を「𠂔」に書く例を古文書などで目にする。



図7. 「開」の字体 (①「居延漢簡」 ②長野県屋代遺跡群70号木簡
③正倉院文書天平21年具注曆：平川(2005))

b 開

壺杆塚の銅盒銘文にある開の字は門構えの左半分が欠けた「𠂔」字で、広開土王碑にもまったく同じ字形がある。現用漢字とことなり、門構えのなかの「井」字は「开」ではなく「井」字につくる。この特異な字体は、中国では4世紀代の晋・王羲之「澄清堂帖」にあり、漢代の「居延漢簡」にもみられる

〈図7〉。日本における用例が長野県千曲市屋代遺跡群から出土した7世紀後半から8世紀の木簡にあることを平川南が紹介している（平川2008）。正倉院文書の天平二十一年具注暦の断簡にもみられる。野中寺弥勒像台座銘にある「開」字は門構えを簡略化しているが、その筆法と書風が伝聖徳太子筆『法華義疏』にみられると、西川寧は指摘する（聖徳太子奉讃会編1971）。

近代以後も、毛筆による書簡などでこの異体字は伝統的に使われた〈図6〉。明治期の文人政治家の手による書画などで見かける。門がまえは行書体などで字をくずす場合に「つ」字状に略すと書きやすいからであろう。

広開土王碑には、このほか弓(氏)、羌(差)、亲(辛)などの異字体がみられるが、井上秀雄によると、「𠂔」と「𠂔」の二文字は極端な省略文字で、墓主名と始祖が昇天した聖地の地名に使用されているという（井上1988）。高句麗の独自性を主張したのであろうか。



図2. 新羅・慶州皇吾洞16号墳出土‘大富’銘銅鉢（左）同・鶏林路古墳出土‘弔’銘銅鉢（右）（国立清州博物館2000）



図3. 同上の底部（国立清州博物館2000）

4. 瑞鳳塚出土盒（銅鏡）と銘文

壺杆塚に隣接した瑞鳳塚は1926年に小泉顕夫によって発掘された。発掘後5、6年経ったころ、朝鮮総督府博物館館員の野守健は銀製盒の実測中に蓋の内面と身の外底に銘文があるのに気づいた。

□寿元年太歳在辛三月□太王^敬造合杆三斤（盒身の裏底）

延寿元年太歳在卯三月中太王^敬造合杆用三斤六両（盒蓋の内部）

銘文は針の先で書いたような、細い陰刻の文字で刻まれていた。第二次大戦後、李弘植博士は外底の3文字「三月」「杆」と、さらに「三斤」を追加発見した。「延寿」の年号は、新羅はもちろん高句麗や百済のものでもない。中国にもなく、最近の研究では高句麗長寿王の逸年号とみる考えが有力である。「延寿」は「延年」の意味で、道教的に理解してよいとおもう。なお平安時代に桓武天皇が採用した「延暦」も道教教典に使われた言葉で、延暦寺も京都御所鬼門守護の大寺院にふさわしいものであろう。

蓋と身に刻まれた干支をあわせた「辛卯」年を、新羅が年号を定めた法興王23年（536）以前で『三正綜覧』などにあたると智証王12年（511）か訥祗王35年（451）であるが、出土した高杯などの遺物からみて、瑞鳳塚は5世紀中葉か第3四半期ごろに編年されるので、訥祗王35年（451）すなわち長寿王39年（451）とみたい。5世紀以前の「太王」号の使用を考えると、451年とみるのが妥当である。「太王」の次の字は判読しづらいが、「教」（「敬」）とみて「教して造らしむ」とよんで無理はない。統一新羅期の碑石にみられる「教令」と同じく、王命を意味するものであろう。



図17. 高句麗・慶州瑞鳳塚出土「十」字形鈕付銅碗（国立清州博物館2000）

5. 金属製容器などについて

慶州・瑞鳳塚出土の銀盒は、蓋のツマミが「十」字形の別铸件で、鍛造によってつくられている。製作地については、高句麗とみるか新羅と考えるかが問題となるだろう。同形でそっくりの銅製盒が集安・七星山96号墳で出土しており、基本的に高句麗製品と考えてよい。

鑄造製の轆轤びきによる器壁の薄い半球形の挽き物で、蓋にツマミが付き、胴部などに突帯がめぐる。

新羅地域から同様の形態の盒が出土している。慶州・天馬塚（銅盒）、同・皇南大塚南墳（銀盒）、同・銀鈴塚（銅盒）、同・皇吾里16号墳（銅盒）、慶山・造永洞EⅡ-1号墳（銅盒）、昌寧・校洞古墳（銅盒）、慶北大蔵品（銅盒）など4～5世紀の新羅の古墳から出土するこれらの容器は高句麗から受け入れるようである。6世紀代まで、おもに古墳に副葬されている。とくに瑞鳳塚出土の銀盒と同一形態で十字形の鈕をもつ銅盒は、慶山造永洞EⅡ-1号墳でも出土しているが、この青銅盒は高句麗・七星山96号墳ともきわめてよく似る形態である。新羅地域のほうが数量的にまさるが、瑞鳳塚の銀盒を新羅製だとすると、銘文も新羅で刻んだことになる。皇南大塚南墳では、ほかに蓋に宝珠もしくは球形などのツマミが付く銅鉢もある。これらの類例は多く、高句麗はもちろん、新羅の壺杆塚をはじめ、国立慶州博物館の菊隠コレクション、昌寧・校洞7号墳、慶州・飾履塚、晋州・水精峯2号墳など、新羅の中枢部や新羅周辺の地域で出土例がある。時代が下がるにつれ、高台部が発達する傾向がみられる。5～6世紀の新羅古墳ではこれらの模倣土器もみられるので、葬祭のための容器だったようだ。皇吾里16号墳‘大富’銘銅盒と鷄林路古墳‘弔’銘銅盒はよく似ていて、壺杆塚銅盒が高句麗での祭儀用だったとすれば、その後新羅に急速に広まった器種・器形だといえよう〈図2・3〉。

皇南大塚南墳の造営年代は402、417、458年説、被葬者は奈勿王説、訥祇王説、実証王説などあるが、総じて5世紀前半の古墳だと考えられる。北墳の年代はやや遅れるが5世紀中葉くらいにみておきたい。なお、壺杆と合杆の名称の違いはわからないが、杆は盂で、鉢の意味であろうか。5世紀当時の呼び方が気になるところである。

高句麗や新羅の古墳には金属容器や青銅製の各種銅器がよく副葬される。王都の慶州のみならず、周辺の慶山や昌寧でも出土している。例えば、昌寧7号墳の熨斗は慶州の皇南大塚北墳のものとほぼ同巧で、皇南大塚北墳出土の別の

長柄付き熨斗は中国の北燕や南北朝に系譜が求められる青銅製容器である。

金冠塚出土の銅製四耳壺は集安の高句麗中期の土器・褐釉四耳長頸壺に器形が似ることから、5世紀前半の高句麗製と考えられるが、金冠塚の新羅土器は5世紀第4四半世紀くらいで、やはり伝世されたものである（耿・林1987）。金冠塚は瑞鳳塚よりやや年代が下るが、いずれも5世紀代におさまる。

このように高句麗の広開土王時代には青銅製の各種銅器が高句麗、新羅地域の古墳から出土する。また金冠塚、飾履塚古墳などでは中国南朝に多いタイプの銅器が出土しているが、江南から直に輸入されたものと断定できない。

西晋末から東晋にかけての帯金具の分布をみると、中国の華北・中原、江南、東北の三燕地域の交流の様相は重層的でやや複雑である（町田1790）。高句麗・新羅地域の古墳で出土する青銅製などの金属容器の系譜や製作地は、中国北朝のみならず中国江南の文物の流入も考慮して、舶載品か内産品かの識別も必要であろう。

瑞鳳塚に隣接する金冠塚出土馬具に玉虫が嵌装されていること、これもひとまず高句麗の影響とみてよいだろう。皇南大塚南墳の馬具や銙帯金具などにも玉虫を使って華麗に装飾が施されている。壺杆塚の盛矢具にも部分的に玉虫で装飾されていることがわかった。高句麗・真坡里7号墳出土頭枕装飾にみられるように、玉虫で威信財などを装飾するやり方は高句麗からの影響とみてよいが、玉虫は現在でも日本列島に多く棲息しており、材料として勾玉の原材料の糸魚川ヒスイなどとともに日本列島の玉虫が交易の対価品ではなかったかと筆者はひそかに考えている。韓国内に翡翠（硬玉）産地がみつからない、玉虫の棲息地がはっきりしない現状なので、そのように推考しておきたい。日本列島では宗像沖ノ島の帯金具、法隆寺の玉虫厨子、正倉院の大刀や矢などに玉虫の装飾が施されているが、新羅文化の影響で最高級の装飾技術が日本古代の工藝品に用いられているといえよう。玉虫による工藝技術の伝播が漢字文化の伝播経路とあたかも符合するかのようにみえる。高度な技術・文化がまず近畿の王権の工房に定着して、地方にも拡がったと考えてもよい。

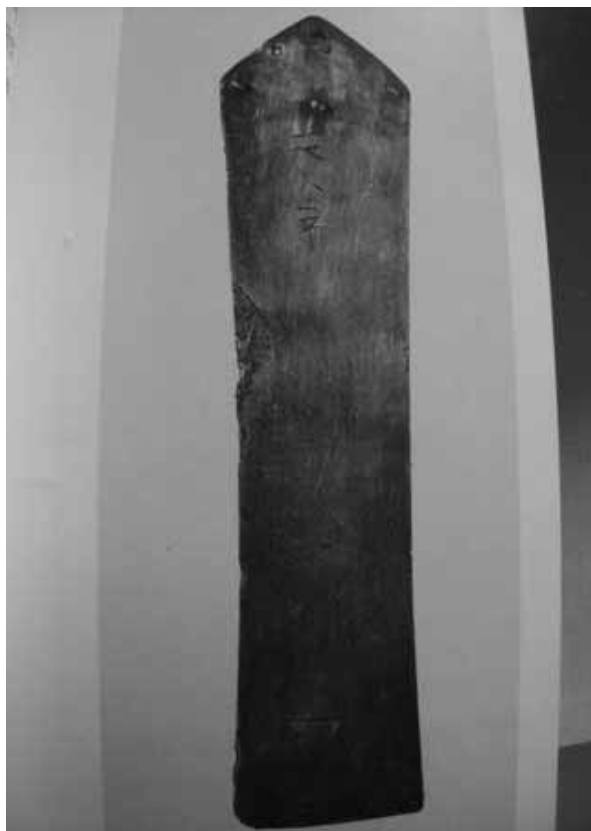


図8. 新羅・慶州皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘鍔帯金具
(国立清州博物館2000)

高句麗が新羅に及ぼした文化的影響は大きいですが、日本列島に及んだ高句麗文化の痕跡や遺物はといえば、ダイレクトなものはきわめて少ない。ほとんどは新羅地域で濾過されたものなのであろうか。

6. 壺杆塚銅鍔の「十」の解釈について

壺杆塚銅鍔の銘文の最後にみられる「十」であるが、これまではたんなる数字、縁起のいい文字、呪術的な意味、など諸説あり、いまだに定まった解釈は

ない。もちろん漢数字あるいは文字とみなしても差し支えないが、別の解釈も可能である。結論から先にいうと、辟邪を表す交叉符号・図形であろうと考えられる。瑞鳳塚などで出土した銅鉤の蓋の「十」字形のツマミ（鈕）も以下に述べるような意図があったものと考えている〈図17〉。

この「十」の符号が皇南大塚北墳で出土した「夫人帯」銘の銀製銚帯金具に線刻されていることは注目される〈図8〉。2013年、金冠塚出土の三累環頭大刀の保存処理を行ったところ、金銅製鞘先金具の佩裏に「尔（尔）斯智王」の銘文が線刻されていることが判明したが、その表の面に「十」が線刻されている（国立龍山博物館「金冠塚と尔斯智王」展2014で見学。図10）。

「十」のほか「八」の刻銘もあり、所有者が同じタイプの大刀を複数持っていたと仮定すれば、その通しNo.であると想像できなくもないが、まだなんともいえない。

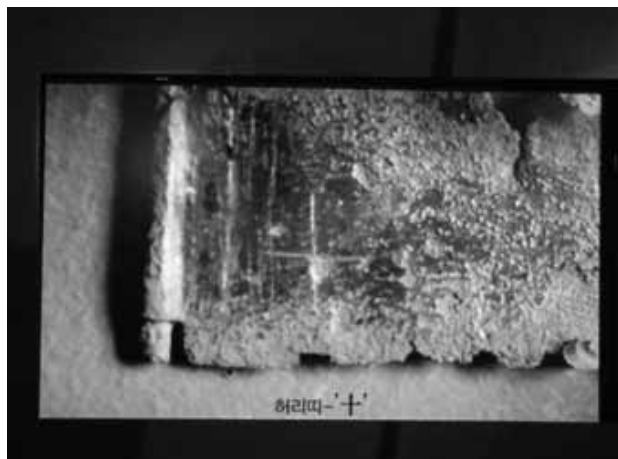


図10. 新羅・慶州金冠塚出土「十」銘大刀金具
（国立龍山博物館にて筆者撮影）

これを、キム・ジェホンは被葬者の靈魂が抜け出さないように封ずる意味で大刀や帯金具に刻んだものと、呪術的な意味に解釈した（キム2014a）。キムは慶州・花谷里土器生産遺跡で出土した統一新羅期土器の底部高台内に刻まれ

た「十」も同様の意味だと考えている（キム2014b）。日本では、1996年に発見された島根県加茂岩倉遺跡で39個の銅鐸（弥生中期末、1世紀中葉）が発見されているが、うち12個の鈕部分に×印が刻まれていた。あとから刻んだもので、そのうちの11個が入れ子の外の中型銅鐸で、辟邪・呪禁の目的で刻み、埋納されたものであろう。神庭荒神谷遺跡の多数の銅剣の茎にも同じ×印があり（358本のうち244本）、やはり埋納前に鑿などで刻まれたものだ。すべて中細形C類の銅剣で、古く紀元1世紀前半まで遡る可能性があり、加茂岩倉銅鐸と共通の信仰や習俗を出雲でみることができる。十の字と×印は同じ意図だと考えられ、広い意味があったようである。上田正昭は×印・×形をイミのしるし、魔除けの除災・辟邪の意味であろうと民俗例をあげながら説明したが（上田1998）、筆者もこの意見に賛成である。北部九州などでモガリとよんでいる地方もあるが、意味深長なるものをおぼえる。ちなみに、大阪・東奈良遺跡出土の銅戈鋳型の茎部や滋賀・鴨稻荷山古墳出土の刀装具などにも×印がある。朝鮮の武器形青銅器で×印のついた事例の有無はわからないが×印の付いた土器は多い（図9・11）。

「×」字は密教の曼荼羅や金光明經に説く四方四仏を意味する記号・符号などと同じく、悪霊・邪気払い、願意達成の魔力をこめて用いたものと考えてよいだろう。「十」や「×」は紀元前の中国で生まれた辟邪をあらわす交叉図形で、朝鮮・日本でも器物に刻まれ書き込まれてきた、単純かつ効果的な呪術的記号である。

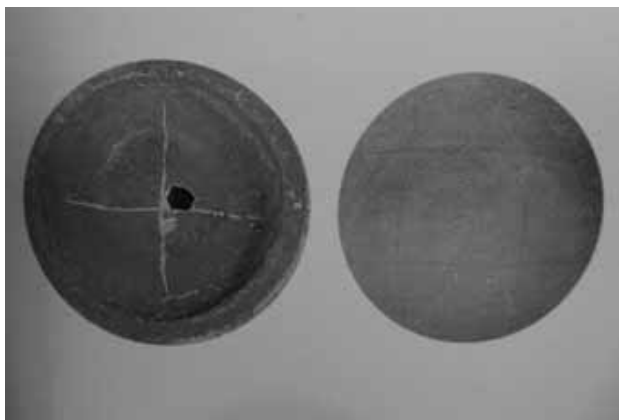


図11. 統一新羅・慶州雁鴨池出土「十」・「井」刻銘土器
(国立清州博物館2000)



図9. 高句麗・大同郡松信里出土壺 (国立清州博物館2000)

7. 「井」字形の符号について

壺杆塚の銅鐙の銘文の上にやや斜めに陽鑄されている「井」字形は高句麗に起源があると考えられる〈図1〉。

この「井」字形の符号、韓国出土の土器に刻まれた例が多くみられるし、日本の古代土器にも墨書土器、篋描土器などにこの符号がしばしばみられる〈図12・14〉。なお、韓国の事例は国立清州博物館『韓国古代の文字と記号遺物』2000に詳しい。当時までに知られた資料が一覧できる。

これまで、漢字の「井」字で、井戸や水の祭祀に関わるものとみなされてきた。結論からいうと、これはおそらく魔よけの符号で（平川2008）、道教的な呪符ともいえる。

「井」字銘もしくは形態を有する遺物は、韓国で最近出土例数が増加している。高句麗地域では、ソウル・シル峰堡壘と阿且山4堡壘など22件、九宜洞で1件、百済地域ではソウル・風納土城で2件、新羅地域では忠州・樓岩里古墳と慶州・月池などで71件あるという（ハ・ピョンナム2006）。朝鮮三国の高句麗、百済、新羅地域でみられるが、高句麗地域と新羅地域に多く、新羅地域ではさらに増加しているものとおもわれる〈図13〉。



图12. 新羅・高靈池山洞出土「井」銘高杯（国立清州博物館2000）



图13. 新羅・尚州青里出土高杯（国立清州博物館2000）

神奈川県平塚市六之域R3遺跡では、吉祥語とともに、「井」が墨書されている土器が出土している。また千葉県花前遺跡群では、文字より記号を中心にしているが、このなかに、「★」とともに「井」字が刻まれたものがある。千葉県庄作遺跡では杯形土器（9世紀前半か）の外面に「佛酒」、底部に「井」字が墨書されている〈図14〉。仏教と道教が混淆している事例である。

埼玉県・揚轆木遺跡で出土した墨書土器（9世紀後半）に、九字を略さずそのものを須恵器の杯底部に墨書したものである〈図21〉。韓国・尚州青里で出土した高杯も略さずに書き入れたものがある。〈図13〉。山形県生石2遺跡では墨書土器の65%を「井」字の記号が占め、神奈川県中原上宿遺跡でも84%に達しているほか、「井」の焼印も出土している（高島1994）。群馬県上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の記号刻書土器にも「井」字のあるものが数点あり、高島英之が紹介している〈図18〉。

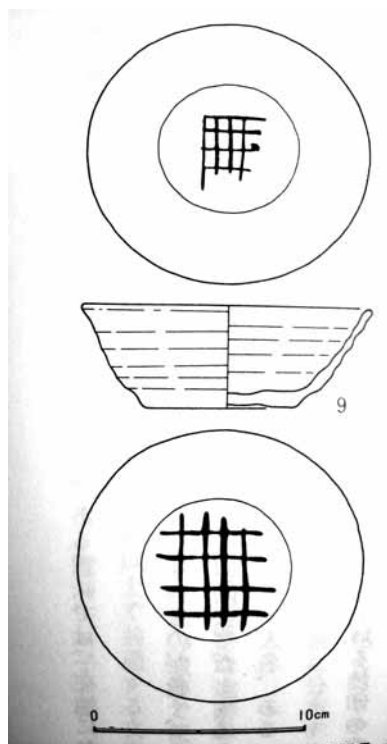


図21. 埼玉県揚轆木遺跡出土墨書土器（高島1994）

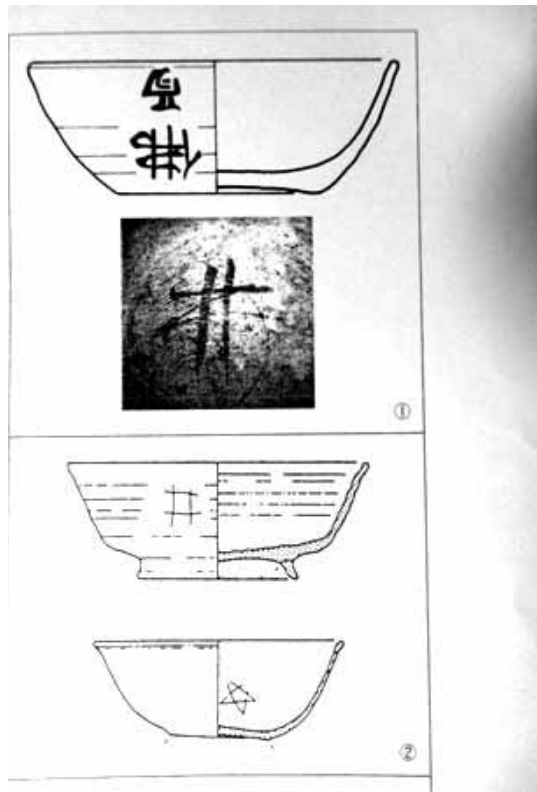


図14. ①「佛酒」と「井」の墨書土器（千葉県庄作遺跡出土：平川編2005）

②「井」と「☆」印を刻んだ土器（千葉県花前遺跡出土：平川編2005）

この「井」の記号は、道教の符号「井」の略と考えられる。「井」の符号は、陰陽道や修験道で魔除・護身の秘呪として用いられる「九字」であるという。これは魔方陣(=三方陣)がもとになって、日本に入ってきたらしい。『禹歩仙訣』によれば、九字には危険な山中などでの修行僧の足づかい（^{へんぱい}反閤=禹歩）を決める作法がしめされている。『西遊記』で孫悟空がみせる踏斗もこの禹歩といってよい。わが国の国技、相撲において土俵で力士が四股を踏むのも禹歩の名残とみてよいだろう。

すなわち僧がそのとき手で刀を模した印（刀印）をつくり、口で「臨兵闘者

皆陳列在前(前行)」(敵の刃物にひるまず戦う勇士が前列に陣取る意)の九つの字を唱えながら、指で空中に縦四本横五本の線を基盤目のように描くと、除災・護身を得られるという呪術である。九は陽の満数で、陰である邪気を征するということらしい。密教の邪氣(邪鬼)を祓う真言で、山伏の人たちは左手に金剛印を結び、右手で剣印を、そして「臨兵闘…」の九字を切る。護符の研究者岡田保造によると相撲取りの手刀もこの九字からきたという。韓国では井の中心は空、すなわち無極而太極であり、十は陰陽で、口字に十を入れ、田ができるので、これが四象になる、などの内容が込められていると『周易』から解釈する意見がある。これによると、「井」は天、「十」は地ということになるが、ここでは深入りしないことにする。

次章で、「井」を符号とみなすのに参考となる陰陽道や魔除けの世界に分け入って、考古学の資料論から解釈しづらい部分を補いたいとおもう。

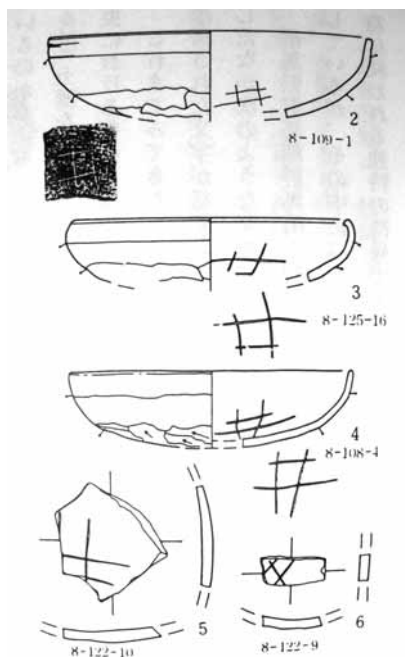


図18. 群馬県上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の記号刻書土器 (高島1994)

Ⅲ 魔除けの符号の文化史的解釈

1. 禹歩について

禹歩は独特の歩行法で、その起源は禹の治水伝説と深い関係があるようだ。禹が治水のため山川を跋涉して偏枯（^{ちゅうぶ}中風）になり、歩行障害がおきた。その禹の歩行を巫師がまねたともいう。古代中国から道教とともに日本に入った。中国古代の占ト書「日書」にみえる占法原理は五行説が中心で、戦国中期の鄒衍の考えが基になっている。北朝鮮・徳興里壁画古墳の墓誌銘にみえるように、亡命漢人の移住や魏晋南北朝期の士大夫層などとの接触によって古代中国の思想がはやくから浸透していた朝鮮では、仏教・儒教とともに、道教・神仙思想が、すくなくとも広開土王時代には支配層に定着していたものと考えられる。広開土王碑には道教の流伝さえおもわせる語（「皇（昊）天」）もみえる。



図22. 九字と禹歩（村山1987）

以下に述べる内容は、1975年末に湖北省雲夢県睡虎地で発見された秦漢などにみえるものである。また「日書」については工藤元男の研究に詳しい（工藤2011）。

前章で九字と危険な山中などでの修行僧の禹歩について述べたが、古代の旅行では、盗賊はもちろん、魑魅魍魎があらわれるなど、現代とは比べものにな

らないほど困難で危険をとまなうものであった。地理書の『山海経』には、鬼神・妖怪のたぐいが、恐れの対象として出てくる。儒教による排除いぜんの神話の世界、民間の習俗などの話が展開するワンダーランドである。

中国では旅人がそのような鬼神・妖怪が出没する行路難にたいして神に無事を祈ったが、その神を「行神」といい、道神・道祖神などともいって信仰された。「行」の字は殷周囲の金文・象形文字などでは十字路をあらわし、道の交わるところで、「境界」をいう。近世の塞の神信仰の原型となる空間である。吉日と良日を選んで、出立する旅人は「祖道」という送行のまつりをおこなった。漢代の祖道では城門の外の道路の左右で行神を祭ったが、その場所が発発先の方によってまちまちで、「日書」では、東・南に出発するときは道路の東に行神をまつり、西・北に向かって出発するときは右に祭るという。そのとき旅人はまずその場を浄めるために禹歩を行なった。旅人が禹の歩行を模倣して行路難を逃れようとしたのであろうか。祖道の儀礼では輶壇をつくり、「夫婦同衣」（古来東西の男女間でおこなわれた下衣の交換）などの行為をおこなう。中国の長沙馬王堆三号漢墓出土のいわゆる「太一将行図」は大野裕司によると天帝の太一が出行するとき神々が守護するさまを描いた帛画で、禹は弓をもって祓禳をおこなう辟邪神とする。そして行人が叫び、出行者自らが禹歩を行ない、道路の祓禳するのだと大野は述べている。禹歩のあと、旅の無事を叫び、禹神に誓う。そして地面に「地の五画」を描き、その真ん中の土をひろってそれを袋に入れ、出立する。

大野は「五画」は「午画」で、辟邪をあらわす交叉図形（+もしくは×）を描くことを意味するとした。「禹に直五横あり」は原文の「日書」には「四」が抜けているが、「九字」を切る呪術であろう。大野は「禹に直^{たて}の横に五^{まじ}（午）わるあり」と読むという見方をしめた。しかし、「四縦五横」と五画は星形五角形の形で、五芒星に五画を描くと、真ん中の部分（内形の五角形）の土を取り出せるので、大野の見方で土を取り出すのは難しい。

禹歩は東晋の葛洪が著した『抱朴子・内篇』仙藥篇および登涉篇が初出で、

中国戦国時代の楚国の巫祝文化である。近年、長江中流域で「日書」が民間占いの実物史料（出土文字資料）として出土しているが、「日書」では禹が行神となっており、土地を治めるため全国を行脚して病み疲れた禹の歩き方を真似ることで道中の安全と保護を願掛けしたことが禹歩の起源という。平安時代の陰陽師安倍晴明は円融天皇の行幸に際して反閤^{へんぱい}をおこなったという記録がある（天禄4年、973）。天皇の行幸や貴族の引っ越しなど、高貴な人物が行動を起こすときに行く手の邪鬼から身をまもるため、呪文を唱えたり印を結ぶことであるが、このとき禹歩をおこなったと考えられる。村山修一『陰陽道基礎集成』1987に、京都府立総合資料館所蔵の九字「四縦五横」や禹歩の説明が載っている〈図22〉。

2. 五芒星と「五」の文化史

ところで魔除の九字は五角形の星形「☆」と一対になって使われることが多い。ここでは星形五角形をめぐる意味や用例を文化史的に探ってみたい。「井」字を魔除けの九字の略号とみるにあたり、解釈の助けとなる話を備忘と研究の余滴の意味で述べたいからである。

「☆」印は五芒星（星形五角形pentagram）と呼ばれ、陰陽道や修験道でいう五行（木火土金水の5つの元素の働きの相克を意味する）のことである。平安時代の陰陽師として有名な安倍晴明を祀る京都・西陣の晴明神社の神紋・紋所となっている。いまでも晴明の生誕地と伝える大阪阿倍野橋付近にある安倍晴明神社や、京都・西陣の晴明神社の屋根瓦やなどにみられる。安倍晴明は「五行」の象徴として五芒星の紋を用いたので、「晴明判紋」とか「晴明九字」とか、「晴明桔梗」（桔梗の花を図案化し、デフォルメしたもの）ともいい、陰陽五行の相生相剋を五芒星で表した。晴明神社のお守りの護符で、また京都あたりでは家紋として現在も使用されている。

元来、星形五角形は西アジア起源の記号だとされ、世界中で魔術の記号、護符に用いられることもあれば、上下を逆向きにしてデビルスター（悪魔の象徴）

になったりする。デンマークのカステレット要塞、北海道の函館五稜郭や長野県龍岡城などの平面プランは星形五角形になっている。函館五稜郭はフランス式の築城法を参考にしたという。五芒星は黄金比（五角形の一辺と対角線の長さの比で約 $1:1.618$ ）と関係して生まれたかたちで、古代エジプトのピラミッドや古代ギリシアのパルテノン神殿などにもあらわれ、西洋の美を象徴する。それに対して日本では古来、白銀比（ $1:1.414$ ）が一般的で、法隆寺の設計に用いた曲尺の目盛りの長さは白銀比であった。こちらは正方形が基本の、日本の伝統美に根ざした象徴である。江戸時代になって京都御所などで西洋風の整形式庭園の影響を受けた、正方形の芝生や幾何学的な花壇が生まれるが、正方形や長方形は日本人好みのかたちである。宮内庁書陵部蔵の指図に描かれた明正天皇の寛永度仙洞・女院御所（1624）、明正院御所（1643）に正方形、長方形を基本とする花壇、芝生などがみられる。現在でも京都御所・常御殿前などに残されているという。キリスト教宣教師によって中国の円明園や日本に西欧の整形式庭園の手法がもたらされたと、建築史家の宮元健次は注目する（宮元2002）。

星形五角形は紀元前7世紀の古代ギリシアの幾何学者ピタゴラスの頃から知られていた図形で、古代エジプト人同様、五芒星を神聖な図形と捉え、自分の教団のシンボルマークとした。弟子たちにはそこに黄金比がひそむことを秘密にさせたという。紀元後には「ソロモンの星」として神秘的な存在となり、ソロモンの父ダビデにちなんだ「ダビデの星」（星形六角形）とともに魔力の象徴となった。のちに、星形五角形は教会のステンドグラスなどにも広く採用された。この五角形は上下の向きで意味が異なる。頂点の一つが上を向く五角形がキリストをしめす正義の位置で、その逆の下向きに置いた五角形は二本の角が生えた悪魔の象徴になるという。この上下の星形の争いをテーマにした西洋映画「ペンタグラム」が上映されたほどである。19世紀、ゲーテの作品「ファウスト」に悪魔＝メフィストフェレスが星形五角形を恐れる場面がある。

現在、世界の国旗のうち、およそ三分の一は上向きのソロモンの星形五角形を採用しているが、アフリカのモロッコの国旗などは典型的な例である。イスラエ

ルの国旗だけは古代ユダヤのダビデの星形六角形を描く。(この六芒星のかたちは、伊勢神宮の奥宮にあたる伊雑宮の御紋である。京都・丹後の元伊勢籠神社と真名井神社や京都の鞍馬寺の本殿金堂前にみる。六芒星検討の余地がある。)

中華人民共和国の五星紅旗は五感星、五行から採ったものであろう。五はもともと平等でバランスのとれた博愛・人道主義的な精神をあらわすという。満州国の「五族協和」というスローガンも、そして「五人組」もまとめるという意図からできたのであろうか。辛亥革命は「五族共和」をうたっていた。星形五角形にはサッポロビールの星マークのように北極星の意味もある。

五芒星の内側に構成される正五角形を取り除いた形を五光星というばあいがあるが、これも五芒星と呼ばれることがある。歌手で俳優のピーターこと池畑慎之介の芸名にある星印も五芒星であろうか。ピーターご本人に確かめたいところである。星形五角形の具体的な用例をさがすと、以下のようなものがある。



図15. 伊勢地方の「蘇民将来」の札 (平川2014)

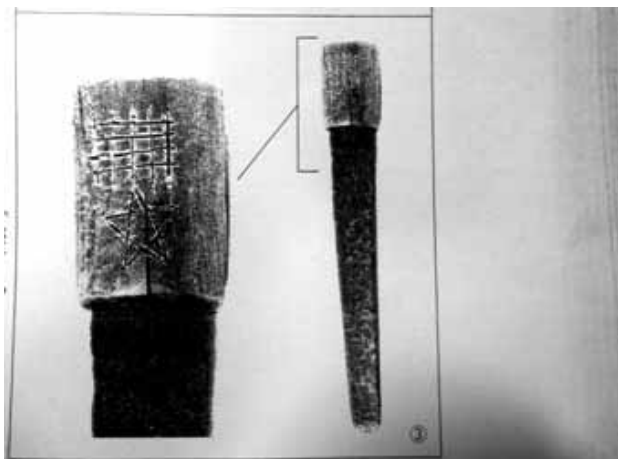


図16. 伊勢志摩の海女の「磯ノミ」(平川編2005)

3. 古代土器にみられる五芒星「★」記号

群馬県上野国分僧寺・尼寺中間地域の遺跡の河川敷から五芒星の「★」を刻書・墨書した8世紀前半代とみられる土器が出土している〈花前ⅠおよびⅡ遺跡。図23〉。五芒星の刻書土器は京都府長岡京遺跡でも出土している。

4. 海女の「磯ノミ」

三重県の志摩半島あたりの海女が、岩についた貝をはがすのに用いる「磯ノミ」という道具の握りの部分に、「𠩺」印や「★」印を刻んだものがある〈図16〉。光があまり差し込まない、魔物が棲むとされる海底に潜って、孤独な作業をする海女の護身の意味で刻んだものである。民間の陰陽道では「𠩺」印をドーマン、「★」印をセーマンと称すが、これは陰陽師の蘆屋道満、安倍晴明に由来する。「★」印とともに刻まれた「井」の符号は九字の「𠩺」の省略したものともみていい。「九字」と「五芒星」が一つの場で使われたということである。伊勢志摩の海女は、もとは福岡県宗像鐘崎の海女、さらに韓国・済州島の海女の潜水法を受け継いでいるので、この魔除けの符号も朝鮮半島経由で

日本列島に入ってきた可能性がある。玄界灘の壱岐島や響灘沿岸で出土する弥生時代の「あわびおこし」は磯ノミの原形とっていいが、弥生時代の‘倭の水人’の道具であった「あわびおこし」にはまだこの符号はみられない。伊勢地方の海女が身につける頭巾には、伊勢神宮内宮の朱印の左右に「𠩺」印や「☆」印を配置して染めている。海女がもつ手拭いにも「☆」と「𠩺」を黒糸で縫いつけたものがある。刺青や海女が潜水時に着る衣装などに描かれていた可能性があるだろう。現在の伊勢地方の「蘇民将来」の札には、呪文の急々如律令の左右に、五芒星と「𠩺」の符号が描かれている〈図15〉。格子状の線数は縦4本・横5本もあれば、縦5本・横4本もある。流儀によって書き順も異なるようだ。述べたように、占ト書の「日書」に「四縦五横」のことが出ているが、「𠩺」印は、九字を切る呪法のこととみてまちがいなかろう。五行・五芒星のことを「清明九字」ともいうが、五芒星と「𠩺」の符号が一体のものであるということであろう。



図20. 高知県のいざなぎ流陰陽道の大夫さんがかぶる花笠の裏にみられるセーマン・ドーマン（『陰陽道の本』学研：横田公人撮影、岡野2010より）

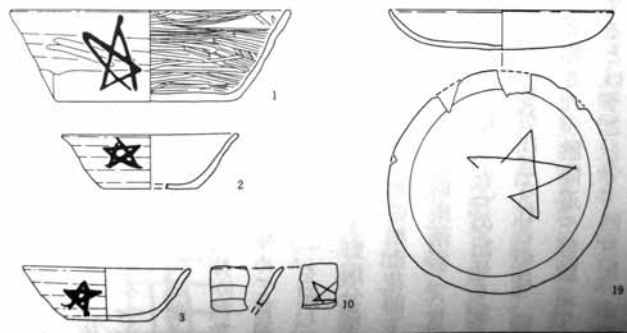


図23. 各地出土の祭祀記号を記した墨書・刻書土器（高島1994）

5. 童歌「かごめ」と星形五角形

魔除けとしての籠目「𦵏」の意味を考えるうえで、宮崎興二（四次元建築論、工学博士）は興味ある事例を紹介している。

この符号は悪魔や魔物にみせて辟邪するシンボルマークで、ひろくみせるものではないが、堂々と人家に掲げて悪魔を退散させるばあいがあった。喜田川守貞著『守貞漫稿』にザルや竹籠を軒先高く屋根の上に高だかと掲げて魔除けとした絵が載っている。『守貞漫稿』は幕末の嘉永6年（1953）にひとまず完成し、明治末年に『類聚近世風俗志』の名で刊行されている。つまり、『守貞漫稿』の絵の光景は幕末から明治時代の江戸・東京の町で普通にみられたものと思ってよい。旧二月八日の御事始めに掲げられ、俗に「清明九字^{ママ}」といった〈図19〉。ザルや竹籠の目の多くは、格子目や星形五角形や星形六角形になっていて、星形六角形の場合は亀甲繋ぎの文様ではなかったかとおもわれる。強力な魔除けになったようで、玄関に掲げると、その緻密な目をみた鬼や魔物は驚いて退散したようだ。いい伝えはいまでも地方で守られていて、年のうち何度か日をさだめて、竹の籠などを軒先高く掲げるところがあるようだ。

児童の遊戯の一つ、籠目籠目でうたう童歌「かごめ」のうたは、一説によると、近世になって応仁の乱以降荒果てた京都の町の再興に尽くした豊臣秀吉を

悼んだ京童がうたったものという。豊臣秀吉が埋葬されている豊国廟（東山の阿弥陀ヶ峰）は竹で編んだ塙（籠目）によって閉鎖されていた。徳川家康の指示で天海や崇伝らが豊国廟から柩を発き、掘り起こしたあと、「夜明けの晩に」参道の石段を縄で引っぱって大仏殿（方広寺大仏）の裏手へ写したという。また参道、鳥居、建物などを破壊した後、大仏殿の地を手に入れた妙法寺が豊国神社の参道を籠目の塙で塞いだという説がある（宮元2002）。参道には竹で編んだ目隠しがあったようで、かごめとはその籠目のことであろうか。歌詞にある「籠の中の鳥」は秀吉のことで、籠は単なる鳥かごではなく、魔除けの意味があったのかもしれない。ちなみに「後ろの正面」は、京都で「正面」といえば、いまはないが京の大仏さんのこと、すなわち方広寺大仏のことである。

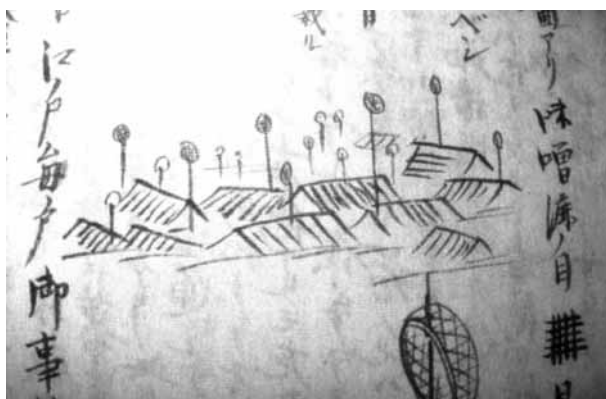


図19. 『守貞漫稿』に描かれた魔除けの竹籠を掲げる
江戸民家の図（国立国会図書館より）

6. 祇園祭の魔除け、^{うしとら}良の「欠け」

籠目の魔力を信じ、魔除けや厄除けに用いる風習が京都の祇園祭に残っているのは興味深い。山鉦巡行の山鉦の山には星形五角形と星形六角形がつながった籠目でできた竹籠を赤い布で覆っている。この竹籠は雷よけだという。まさしく魔除けだといってよい。祇園社は元来、スサノオのミコトを祀り、渡来神

との習合により、牛頭天王ごずてんのうとも呼ばれた。御霊信仰、疫病退散、厄除けの神として信仰厚く、蘇民将来の説話は有名である。牛頭天王は疫神をとってくうと信じられていたから、牛頭天王が中国の辟邪神天刑星の属性をもっているというのは首肯できる。祇園信仰には陰陽道や渡来系氏族の信仰も混じりあっており、天刑星は道教の神である。なお祇園社の創祀の年代ははっきりしないが、神社では斉明2年（656）、高句麗の使いの伊利之使主が来朝したとき、山城国八坂郷に祠を建てたという所伝を根拠に斉明天皇2年説をとる（八坂神社編1997）。裔孫八坂造の氏寺である法観寺あたりが朝鮮系渡来文化の拠点だったとみてよい。祇園祭の鉦と関係するが、スサノオのミコトの居た新羅の曾尸茂梨（ソシモリ）を『魏志』韓伝にみえる「蘇塗そと」（アジール）の習俗と結びつける意見があり、山鉦は新羅「花郎」の歌舞を演じる習俗に通じるのかもしれない。祇園祭の最中に売る蘇民将来のお守りの形は五角柱、六角柱、円形などさまざまなかたちであるが、星形五角形が付いていることがポイントである。

京都御所東北隅の猿が辻のように、京都では鬼門すなわち丑寅（艮）の方角に「欠け」をつくる一般住宅をみかけるが、由緒ある社寺の鬼門の瓦に五芒星が刻まれた例をみることがある。これも魔除けで、猿（日吉大社で祀る大山咋神の使い。魔を去る意か）の置物とともに、辟邪の目的で据えられたものである。御所の鬼門方向には赤山禅院があり、猿を守護としていることも故なしとしない。猿は日吉大社の使いとみてよい。赤山禅院は道教の神をまつる、寺院とも神社ともつかない不思議な場所であるが、大本山延暦寺などとともに鬼門封じの位置にあって京都御所をおまもりしているのである。

大阪城は五角形の敷地に建っているといわれ、石垣には星形五角形の刻印がみられる。函館五稜郭のように城壁が五角形であると、攻守に効果的なかたちなのかもしれない。愛媛県の宇和島城も平面が五角形の敷地に建っているが、これは敵が四角形と錯覚して攻めてきたときに、残りの一辺から逃げるための方策らしい。しかし実際どのくらい効果があったのか疑問ではあるが。

7. 帝国陸軍と五芒星

五芒星のデザインは近現代の日本陸軍で使われたようで、軍帽の天井頂部の平坦部分に五芒星を刺繍しているのを文化学園服装博物館でじっさいに観て確認した（特別展「明治・大正・昭和戦前期の宮廷服 洋装と装束」2014年）。明治の初めから昭和前期まで、帝国陸軍の将校准士官が正装・礼装時に着用する大礼服の正帽の天井部分には金・銀糸で五芒星が刺繍されている。

「陸軍服制」（明治33年の勅令364号）によると、大将から一兵卒まで帝国陸軍の軍帽には五芒星が刺繍されていた。軍旗にも五芒星を刺繍した。日本人の心をとらえるサクラの花、その五弁の花びら（萼）は徽章・校章にも採用されるが、五角形にかようなものがある。平安時代、紫宸殿の南階下に植えられた右近の橘（西）と左近の櫻（東）は、のちに天皇をお守りする近衛師団所属の近衛兵の精神的なシンボルとなり、左近の櫻は淡いピンクのサクラの五弁の花＝五角形で、親しみと人生の刹那を感じさせるものであった。加賀前田家の家紋にも星形五角形が当てはまり、おさまりがよい。サクラに通じる五芒星の星形五角形は、弾除け（＝多魔除け）にも通じ、戦車などの前面にもマークとして使われたり、軍隊と密接な関係があった。

陸軍の軍属においても、親任官以下軍属が着用する軍属服では五芒星を模した臂章が制式であったし、平服に佩用するバッジ（七宝焼きの徽章）にも五芒星がつかわれるなど、戦前の軍人の間では定着していた。現在のアメリカ国防総省ペンタゴンが巨大な五角形であることも意味深長である。

北炭滝之上水力発電所のラウンドトップの窓には星形五角形の五芒星がデザインとして使われている。たんなる図形としてではなく、危険防止と安全操業の願かけのようにおもえる。

IV 高句麗の文字と新羅・倭への流伝

そのほかの高句麗起源もしくは由来の文字、周辺の国に影響を及ぼした文字について記しておく。

a 「㐓」

高句麗の長安城城壁石刻（丙戌年銘、566）には㐓と旁だけで書いて、「部」の意味とした文字がある。この省略の字形は百済の木簡や石刻、日本古代の木簡でもよくみかける。長安城城壁石刻には吏読的書法もみられ、朝鮮独自の語法とみてよい。

旧加耶の地域から出土した昌寧校洞11号墳の有銘円頭大刀に「上部先人貴口乃（刀？）」の銘が銀象嵌されているが、「部」字は普通に部の字で省略されていない。この上部は高句麗の五部が加耶にも及んでいたのか。また先人も高句麗の最下位の官位で、高句麗の影が加耶地域の南部までしのび寄っているかのようなのである。高句麗には円頭大刀の実例はいまのところない。

島根県の岡田山1号墳円頭大刀（6世紀）の銘文は「各田㐓臣（額田部臣）」で、省略文字で象嵌されている。滋賀・森ノ内出土木簡（7世紀後半）には「㐓」字とともに「之」字も同一木簡に書かれている。千葉・龍角寺五斗蒔瓦窯跡出土のヘラ書き瓦には「㐓」字で部を意味している。

平城宮跡出土木簡などに部を「マ」字状に書いたものをよく見受ける。もともと高句麗起源の略しかたで、古代日本でも省略文字はおこなわれた。木簡にはこの方が、字画が少なく書きやすい。

新羅木簡の影響は奈良時代にも散見する。宮殿の門にかかわる「兵衛木簡」と同じ形式のものが新羅の雁鴨池で出土している。新羅の「誓記体」はおもに行政文書で使われたが、日本の古代の行政文書である木簡の書き方には新羅・百済の流儀がかなりみられ、渡来人の官人の関与が考えられる。

b 「之」

広開土王碑第4面は最後に「之」で終わっている。これは終止の指示で、文

の終わりに句点のように用いるものである。いわば置字である。文章の終わりを「也」であらわす用法と同じく朝鮮半島の用法である。新羅の「壬申誓記石」に「可容行誓之」とある。「誓記体」とよばれる漢字を朝鮮語の語順に並べた変体漢文の文体で刻まれ、吏読以前の古い表記法が窺える。「壬申」年は552、612、792年説がある。「之」字は、591年に建てられた新羅の「南山新城碑」にも、他の吏読文字とともにみられる。ただし、中国の『翰苑』（660年以前）にもみられるので、高句麗独自の用法とするには多少の留保が必要のようだが（藤本1988）、碑石などの新羅語にははっきりとみえている。後述するように、奈良県太安万侶墓誌（723）や大阪府桑野遺跡木簡（7世紀中葉ごろ）に事例がある。

c 「𣎵」

日本ではこれまで、漢字は中国から直接伝来したものと考えられていた。しかし、文字の省略体・異体字・符号などは高句麗に起源をもち、新羅・百済・加耶を経て日本列島に伝わった文字文化があったことがわかってきた。

狩谷掖斎いらい日本でつくられた国字と認識されていた「𣎵」字についても韓国で最近発掘調査によって出土した例（出土文字資料）があり、これも高句麗起源であることがわかった。意味は古代日本で使う大蔵、内蔵の蔵と同じで、百済にいう「内𣎵部」などにあたる役所であろう。慶州の皇南洞遺跡出土の木簡（8世紀ごろ）に「下𣎵」、雁鴨池出土の硯に「𣎵司」などの墨書された例がある。「𣎵」字は滋賀県野洲市西河原森ノ内出土の「森ノ内木簡」に「𣎵直」という人名がみえ、福岡県井上薬師堂遺跡出土木簡（7世紀後半）に「白日𣎵」という語が使われている。

徳興里古墳墓誌の銘文に「食一𣎵」の字句がみえるので、高句麗で用いられた高句麗由来の字といえる。新羅経由で日本にはいった可能性がある。

𣎵は中国では植物名である。李成市は稲葉岩吉の仮説（『釈𣎵』1936）からすすんで「魏志高句麗伝」の桴京（＝小倉）は「𣎵」字が桴の音と京の訓が合わさって成り立ったと推定した（平川2005）。天寿国繡帳銘（『上宮聖徳法王帝

説』引用)にみえる令者、椋部の秦久麻なる人物の名前にはまだカバネがみえないが、「椋」部、大蔵省に属していた下級官人で、財政にも長けた人物であったと想像される。藤原宮跡や飛鳥池出土の木簡などでもこの字をみる。

d 「𪛗」

「𪛗」字はアワビ(鮑・鰈)で、古代日本で使われた国字だと認識されていたが、新羅の慶州・雁鴨池(月池)出土木簡にこの字がある。中国にはない字である。

e 「𪛗^{いっ}」

「𪛗^{いっ}」は中国では金属の重量単位であるが、日本ではカギの意味である(諸橋轍次『大漢和辞典』)。奈良の「二条大路木簡」などにみられ、これも日本固有の用法だと考えられていたが、新羅王宮の苑池・雁鴨池で出土した7世紀代の鍵に「合零閼𪛗」と刻まれていた。平安時代には「籥」・「鑰」がカギの意味での正式な語であったが、「𪛗」字も使われたことがわかり、新羅と同じ用法であったことは注目される。

このように日本古代の文字文化に与えた新羅の影響は大きい。木簡自体をみると、咸安・城山山城出土木簡(新羅、6世紀前半)の下方にはV字形の切り込みを入れたものがある。日本の古い木簡にかかる例がわずかにみられるとのこと、新羅木簡の影響だろう。考古資料論からのアプローチが期待できる。

V 高句麗・新羅の文字資料と用法

おわりに、高句麗と新羅・倭に共通して見られる字形や用法・用例について、追加的に述べたいとおもう。

1. 順興壁画古墳と「○○人」の表現

慶北・順興邑内里壁画古墳に記される墨書の銘は現在朝鮮半島で最も古い。墨書銘は「己亥中墓^像人名□□」で、己亥は579年で己未とみる説もあるが、

「亥」の字の崩しであろう。和田萃によると、藤原京跡出土木簡にある「己亥年十月中上埭國阿波評松里」など、日本の木簡にも例があるという。墓口人は墓像人とよめるが、この墨書は玄室南壁の袖石に描かれた力士像の上部にあり、墓守人を意味するのかもしれない。この「某人」という表記の仕方は、埼玉・稲荷山古墳鉄剣銘にある「杖刀人」、熊本・江田船山古墳の大刀銘にある「典曹人」の書き方に通ずる。これは広開土王碑に「守墓人」とある表記法で、新羅では冷水里碑の「典事人」などに受け継がれている。後述する。

順興壁画古墳の位置は新羅の辺境で、高句麗との国境付近にあたる。もとは高句麗領であっただろう。壁画にみられる図像が三室塚、通溝四神塚に通じること、さらに鬼神図などは北魏の6世紀代の北朝壁画に系譜が連なるので、高句麗文化の影響が及んでいた地域といえよう。また、順興の東方、東海岸の蔚珍鳳坪新羅碑（524）のある付近も旧高句麗民の居住地である。碑文は順興の民に道の整備のために動員をかける内容で、土着の濊人の胥吏にも通じる言語で表記したかもしれない。この碑も広開土王碑を襲った四面碑石のスタイルで、新羅王都や東北に至る交通の要衝であり、軍事的にも重視された地域である。

2. 「大王」の用例

日本の5世紀における大王の呼称も高句麗を意識したものだという意見があり、広開土王碑の碑字にある「太王」や牟頭婁墓（5世紀中頃）墨書の「大王」との関係さをさらに考究してみる必要があるだろう。新羅では「太王」という王の呼称は眞興王巡狩碑と蔚州川前里書石にみられ、受け継がれるようだ。忠南大学校所蔵の「大王」の刻字が付いた大伽耶タイプの長頸壺は加耶における用例であるが、出土地不詳であることが惜しまれる。

3. 「前」の用法

藤原宮跡出土木簡（7世紀末）に「…賜申大夫前」の形式をとる「申前文書」があるが、これも朝鮮文書の形式に倣ったものであろう。京畿道二聖山城一次

貯水池出土の戊辰年木簡（608あるいは668年）に「須城道使村主」の次に「前」の語がある。欠けた部分に、「申す」にあたる字があったと推定される。新羅時代の狼煙・烽火に関する木簡で、遺跡のある付近は高句麗との戦線地帯である。この「前」は、現代の朝鮮・韓国語で「^{アプ}앞」、筆者も書簡等で、宛・御許・御中のつもりで畏まった表現として使うことがある。

4. 新羅語にみられる吏読とその影響

中国の影響を強く受けた朝鮮では樹碑の風が日本よりも根強く定着している。ここ20年に多くの碑石が発見され、多くの漢文に混じって古代新羅語というべき吏読^{りとう}が確認されるので重要な史料である。吏読を含む統一新羅時代の新羅語が碑文や文書、経典などで確認されている。

吏読はおもに公文書に多く用いられており、漢字の音訓を借りて助詞・助動詞もしくは名詞などを表記したもので、漢字で自立語を朝鮮語順に並べ、吏読を挿入して文章にしたものである。吏読は日本の宣命書きに似る。宣命書きは助詞などを小文字（小書体）で記すが、吏読では自立語と文法要素の文字サイズが同じ大ききで書かれていて、見かけは漢語・漢文と変わらない。平川南によると、日本の木簡では、7世紀後半の宣命書きは吏読のように助詞も本文と同じ大きさの文字、大書体で書いていたという（平川2008）。藤原宮木簡がそうである。ところが、奈良・飛鳥池遺跡から一つの木簡に大書体と小書体の両方が書かれている7世紀後半の木簡が出土して、8世紀以前に「割注」のように助詞などを小さく書く小書体が生まれていた可能性がでてきた（平川編2000）。今後資料の増加をまちたい。

7世紀ごろの木簡などに「移」を「ヤ」と発音したり、「止」を「シ」ではなく「ト」と音読みする古韓音による読み方を見うける。奈良・飛鳥池木簡にある「熊」の字は「汗吾＝ウグ」と古韓音で読むと小書体で書かれているが、現代朝鮮語の発音「ung」に近いのであろう。埼玉稲荷山古墳鉄剣銘の「居」も「ケ」と発音したようである。「仮借」の方法が当時の日本語に定着して、

これらが万葉仮名になっていく、と国語学の犬飼隆はいう。

新羅・瑞鳳塚銀盒銘文に「三月中」とあるのは吏読を用いた初出の例である。「三月中」の「中」字は言語学者の村山七郎や藤本幸夫によると朝鮮語で「～に」の意の助詞、つまり時格に用いた吏読のひとつだという。江田船山古墳大刀にも「八月中」とあり、書者は「張安」で朝鮮系渡来人が関与したらしく、5世紀の新羅か百済の表記を襲っている可能性がある。兵庫県八鹿町箕谷2号墳大刀（戊辰年、548）の銘にも「五月」中とあるから、日本でもかなり普及した用法である。藤本によれば、もともとは中国の秦漢に由来する語という（「雲夢睡虎地秦簡」、「居延漢簡」などに事例がある）。高句麗では中原高句麗碑に「十二月中」「五月中」、平壤・長安城の城壁石刻に「二月中」とあり、高句麗では5～6世紀に使われた用法である。新羅の蔚州川前里書石や丹陽赤城碑にも用例をみる。「中」とあわせて、鉄剣銘の「七月中記」の「記」字も新羅に用例が多い。中国では稀な用法らしく、藤本幸夫は中国から用法を受け入れた後に新羅でさかんに用いるようになったとみる。日本でも5例以上用例がある。

朝鮮における現存最古の写経に755年書写の新羅白紙墨書大方広仏華嚴經（三星財団リウム蔵）がある。吏読の識語が付されており、時格に処格の要素が加わった「中」が多くみられる。木村誠の研究が参考になるので詳しくはそれによりたい（「統一新羅の骨品制—新羅華嚴經写経跋文の研究」『都立大学人文学報』185、1986）。

吏読で忘れられないのは、戦前、慶州在住の大坂金太郎が錫杖寺址で発見した「壬申誓記石」である。吏読が混じり、吏読以前の古い表記がみられ、新羅語を研究する上で貴重な金石文史料である。

壬申誓記石の銘文は高句麗から漢字・漢文を受容した新羅では独自に文字文化をみ出した、いわゆる変体漢文であるが、そのまま日本語の語順でよめる。本場中国の正格の漢字・漢文を受容して使用しながら、固有名詞などは漢字の音を借りて表現したり、自分たちの言葉に並べ、やがて新羅語らしくなっていっ

たのであろうか。おそらく中国の漢字・漢文を、漢四郡の設置・運営に携わった朝鮮人胥吏が行政管理上、人名や地名を漢字音で表記したことから、少しずつ朝鮮にひろがっていったものと想像される。それは漢語の漢字・漢文の文化が高句麗から伝わり、新羅語が整っていく過程でもある。壬申誓記石には「誓記体」成立の文法要素が隠されている。

壬申誓記石の銘文にある「可容行誓之」の「誓」字は目的語が前にあって、正格の漢文体ではない。この文に「之」字は必要ない。しかし、新羅では「南山新城碑」(591)をはじめ、金石文などに多くの事例がみられる。もともと広開土王碑文にあるように、高句麗で通用した用語法であろう。奈良・太安万侶墓(723)の墓誌にも終止の語尾として「…卒之」という用例がある。「之」は朝鮮吏読を踏襲した使い方である。大阪の「桑野木簡」は官衙跡の井戸から出た呪符木簡であるが、「…白加之」と人名の次に「之」がきて終わる。

5. 「〇〇人」という表記

埼玉稲荷山古墳の鉄剣銘などの「某人」という表記は、直木孝次郎のいう「人制」と呼びうるもので、5・6世紀には「酒人」「倉人」などの役人がいたらしい(直木1958)。大王、杖刀人、典曹人などの官職名は漢字一字一音をあてて表現ではなく、ほんらい使われていた和語を漢義でもってあらわしたのである。また己亥中というように年号のあとに中をつけるのも、また鉄剣銘の「辛亥年七月中記…」の「記」の用法も直接には朝鮮からの影響と考えてよいであろう。伝加耶地方出土有銘単龍紋環頭大刀(東京国立博物館蔵)の象嵌銘文の富・多・令・此・刀は稲荷山鉄剣の文字スタイルに似ている。これは、朝鮮半島から伝わった表記や技術の流儀といえよう。千葉県市原市稲荷台1号墳の「王賜」銘鉄剣の「賜」字も中国語では「賜う」意味の動詞であるが、「法隆寺金堂薬師如来像光背銘文」(7世紀)のように、尊敬の補助動詞に使うようになる。犬飼隆は新羅の永川菁堤碑(「貞元14年(798)」)の「…以見令賜矣…」の賜は「なさる」にあたる尊敬辞si〔シ〕を表記したもので、敬語の補

助動詞だという。正格の漢文には必要のない文字である。日本の変体漢文成立にあたって、新羅語の影響を感じさせる事例である。詳しく述べられないが、永川青堤のような新羅の築堤技術は、渡来人によって日本列島にもたらされているので、情報ネットワークのチャンネルが考えられる。

6. 「𠂔」の字

稲荷山鉄剣銘文にみえる「𠂔已加利獲居」と「半𠂔比」の人名の使われる「𠂔」の字は『日本書紀』などに頻出する。広開土王碑の碑字にあるので、高句麗由来の字としていだろう。『翰苑』西南夷などには𠂔人に「𠂔」字が使われている。𠂔は氏で、𠂔人はチベット系の民族である。氏族の前秦の王苻堅は4世紀後半に華北を統一、高句麗や新羅は前秦に朝貢していたので、この字は朝鮮に入っていたものと想像される。

「𠂔」は氏の古い字で省画されたものである。「神功紀」46年に、百済から渡来してきた三人のうち久氏なる人物がいるが、天智紀2年にみえる𠂔礼城、牟𠂔も百済地域の城や地名で、総じて百済で用いられている。江田船山古墳鉄剣銘の典曹人「无利𠂔」は大刀の所有者であろう。これは人名を漢字の音であらわしたもので、のちに万葉仮名に発展する使いかたである。「𠂔」は東北古代史に登場するアテルイ（阿弋流為）の名まえにもみられるし、民訴状で有名な紀伊国阿氏河莊の氏も𠂔である。

7. 則天文字について

宮城県名取市新宮寺一切経約三千点のなかにある大方広仏華嚴経（大治4年＝1129の年紀）に則天文字がある。大方広仏華嚴経は日本には唐代に伝えられ、その後写本を繰り返すうちに特殊な字が魔力などとして残ったのではないかと平川南はいう。則天文字は中国では武後の死後に使用禁止となり、見られなくなるが、かえって日本には使用例がある。和銅元（708）年の銘をもつ「下道圀勝・圀依母夫人」の骨蔵器の「圀」はよく知られているが、最近、8～9世

紀ごろの地方の土器に則天文字が墨書された例（群馬県二之宮宮下東遺跡、石川県三小牛ハバ遺跡、島根県出雲国府跡、宮城県山王遺跡、福島県辰巳城遺跡、群馬県清水田遺跡など）を平川が紹介している（平川2008・2014）。古代社会で文字が魔力や権威をもって存在したという平川の意見に賛成である。当時の識字率を考えても、その意味を解する人は限られていた。現代人にとって則天文字は、テレビでおなじみの水戸黄門様で知られる徳川光圀の「圀」字で知っているくらいであろう。17字あった則天文字はいま絶滅したようだ。わが国では正倉院にある707年書写の『王勃詩序』で使用例が確認されるが、704年帰国の大宝の遣唐使によってもたらされたと考えるのが合理的である。新羅の鶏林路古墳出土の銅鏡に「𠂔」なる刻字があるが、これが則天文字のかまえ𠂔に似ている（図3の右）。韓国では「𠂔」字と解されている（国立清州博物館2000）。篆書体に近い字形であるが、日本古代の墨書土器の研究で吉祥または魔除けの意味をこめて特殊な字形「𠂔」や「𠂔」を用いた例が知られるようになった。この字形は則天文字や道教の呪符の影響と考えられるが、則天文字成立以前に高句麗もしくは中国に象形の文字や道教の呪符のようなものがあつたのかもしれない。新羅の文字文化の成立と定着に、高句麗の影響を考慮せずにはいられない。

〔擱筆にあたって〕

以上、卒爾の間に筆のおもむくままに急ぎ書き綴ったが、雑駁な議論でまとまりなく、忸怩たるものを覚える。今後の議論の予察として備忘のために記した雑論文だと、ご笑覧いただければ幸いである。本稿起筆のきっかけは、小生の個人的な書道趣味と長崎市の市章の形が印象に残っていたからである。「ソロモン（スレイマン）の星」のペンタグラム形で、いまでも長崎市内のマンホールなど見かけるが、ウィキペディアによれば、草書体の「長」の字を図案・模様化し、「鶴の港」長崎を象徴して、折鶴の形を星形にデザインしたものだという。内形には安政年間に開港した5港のひとつであることを誇りにして「市」

字を配したらしい。五芒星や陰陽五行の思想はないようだが、その意味を加えて、被爆都市長崎の平和と安全を祈ってはいかがであろう。

主要参考文献・引用文献

- 東潮・田中俊明編著1988『韓国の古代遺跡1 新羅（慶州）』
- 有光教一1970「半島に埋もれた文化交流の謎を掘る」『沈黙の世界史』10
- 井上秀雄他1974『東アジア民族史1—正史東夷伝』
- 井上秀雄1988『古代朝鮮史』
- 上田正昭1998『論究・古代史と東アジア』
- 大野裕司2006「『日書』における禹歩と五晝地の再検討」『東方宗教』108
- 岡野玲子2010「陰陽師から見た平安京」『平安京のコスモロジー(鎌田東二編)』
- 狩谷掖斎（山田孝雄^{よしお}・香取秀真増補）1968『古京遺文』
- 韓国考古学会2007『韓国考古学講義』
- 魏存成1994『高句麗考古』
- 吉林省文物考古研究所他編著2010『集安出土高句麗文物集粹』
- 吉林省文物志編委会1984『集安県文物志』
- キム・ジェホン2014 a 「‘尓’斯智王’ 銘大刀と金冠塚の主人公」『金冠塚と
‘尓斯智王’』中博シンポ資料
- キム・ジェホン2014 b 「新羅王京出土銘文土器の生産と流通」『韓国古代史研究』

73

- KBS歴史スペシャル2002『歴史スペシャル』4
- 工藤元男2011『古いと中国古代の社会』
- 耿鉄華・林至徳（緒方泉訳）1987「高句麗集安土器の基礎的研究」『古代文化』39-8
- 国立慶州博物館2002『文字からみた新羅』
- 国立公州博物館・忠清南道歴史文化院2006『漢城から熊津へ』
- 国立清州博物館2000『韓国古代の文字と記号遺物』

- 国立文化財研究所2005『韓国金石文資料集』（上）
- 国立歴史民俗博物館2014『文字がつなぐ 古代の日本列島と朝鮮半島』
- 齊藤大輔2013「皇南大塚南墳副柳出土鉄鉾の系譜」『福岡大学考古学論集』2
- 佐伯有清編訳1988『三国史記倭人伝 他六編 朝鮮正史日本伝1』
- 輯安縣文物保管所1984「輯安縣上・下活龍村高句麗古墓清理簡報」『文物』1984-1
- 聖徳太子奉讃会編1971『法華義疏』
- 鈴木由次郎1977『周易参同契』（中国古典新書）
- 高島英之1994「古代東国の村落と文字」『古代東国の民衆と社会 古代王権と交流2』
- 朝鮮史學會編1973『支那史料抄』
- 張楚金『翰苑』（1977年 復刻）
- チョ・ユジョン、イ・ギファン2004『考古学者チョユジョンの韓国史ミステリー』
- 東京国立博物館1992『伽耶文化展』
- 東野治之・平川南1999『よみがえる古代の碑』
- 東野治之2004『日本古代金石文の研究』
- 直木孝次郎1958「人制の研究」『日本古代国家の構造』
- 奈良国立文化財研究所編1991『平城宮 長屋王邸宅と木簡』
- 二玄社1979『木簡残紙集』3
- 平川 南編2000『古代日本の文字世界』
- 平川 南編2005『古代日本 文字の来た道』
- 平川 南2008『新視点古代史 日本の原像』
- 平川 南2014『出土文字に新しい古代史を求めて』
- 平山観月1962『新中国書道史』
- 藤本幸夫1988「古代朝鮮の言語と文字文化」『日本の古代』14
- 釜山廣域市立博物館1997『遺物に刻まれた古代文字』
- 朴天秀2007『加耶と倭』

町田章1970「古代帯金具考」『考古学雑誌』56-1

宮崎興二1995『なぜ夢殿は八角形か』

宮元健次2002『日光東照宮 隠された真実』

村山修一1987『陰陽道基礎資料集成』

八坂神社編1997『八坂神社〈改訂新版〉』

* 文献は著者・編者・発行所を日・韓・中の日本語のアイウエオ順に配列した。

韓国文の文献は日本語にして、中文文献とともに日本語読みで並べた。

* 一部、ウィキペディアを参考にした。

* 韓国の古代文字の情報について、朴方龍博士から学ぶところが多かった。感謝したい。また、平川南氏の著書から学ぶところが多かったことも記し、あわせて感謝する。

